



# 男は 痛い !

國友万裕

第8回

棒たおし (2003)

## 1. 裸教育

連載も今回で8回目だ。このあたりで、そろそろ、これまで書いてきたことを振り返らなくてはならないと思っている。

この連載を読んできて、「男の裸」の話が多いことに気付いた人は多いと思う。これは何よりも、僕が中学3年生の秋から半年間、一貫して、男子全員上半身裸で体育の授業を受けさせられたせいである。最初の連載にも書いたと思うが、この時の体育教師は大学を出た後、5年ほど浪人し、やっと採用試験に受かって僕の学校にやってきた教師で、当時まだ20代だった。僕が中2の時にやってきたのだが、上半身裸を強要するようになったのは、中3の秋。本当は1年目から、裸教育をしたかったのだろうが、さすがに1年目から極端なことをするのは気が引ける。それが2年目になってある程度自信をつけて、それでこういう男根的な教育に出たのだと思う。

僕がこの教師から受けたトラウマを、どうにか母に打ち明けたのは、大学を卒業する間際のことだった。高校に入ってすぐに不登校になり、その後、少しずつ母に、それまでのトラウマを打ち明けてはいたものの、この核心の部分だけは、どうしても話せなかった。もちろん、僕が不登校になったのには、様々な理由が絡み合っていて、この問題だけで不登校になったわけではない。僕は小学校の高学年の頃から男であることに理不尽さを感じ始め、中学に入ってから学校になじめず、日を追うごとに少しずつ学校嫌いが深まっていた。1年生の頃から、先生たちからは誤解され、理不尽に怒鳴りつけられ、女の子たちの

執拗ないやがらせの日々が続いていたのだ。裸教育が始まる以前から、僕の心は弱り切っていた。その弱っていた僕の心を完全に壊したのは、この裸教育だった。母は、この教師が男子全員に上半身裸を強いていたことは知っていたのだが、女性だから、男が裸を強要されることの屈辱にはピンと来ていない部分があった。また僕がこの教師から受けた暴言や恥辱の数々は具体的には知らなかった。忌むべき体験を僕が語った時、「ごめんなさいね。それも知らずに、『学校に行きなさい』とうるさく言って」と母は涙ぐんだ。「あの人は見るからにそういう人だったからね」と母はもの思いに浸ったような顔で述懐したものだ。母は、この教師を学校の集まりなどで、数回しか見たことがないはずなのだが、その母の目にも、この教師は、一目瞭然、威圧的で権威主義的な人物に見えていたのである。

岡崎勝さんの本に『体育教師をブツとばせ！』（風媒社、1986）という本がある。一般に体育教師は体罰など、生徒の自尊心を傷つけることにかけてはプロフェッショナルなので、このタイトルを見ただけで買いたくなる人も多いに違いないが、僕にトラウマを負わせたこの教師は、悪評高い体育教師のなかでも、とりわけ極端なタイプだった。一步間違えれば、生徒を自殺に追い込むようなことであっても、この人だったらしていただろう。今年も体罰で自殺する子が出て、体育教師の体罰がその原因であると騒がれたが、僕はあのニュースを聞いた時に、自殺した子よりもむしろ教師のほうに同情してしまった。なぜなら、僕を自殺の寸前まで追い詰め、僕を不登校に追いやったこの体育教師は、その後解雇になることもなく、最終的には校長におさ

まったと聞いているからである。僕があの時、自殺していたら、この教師もマスコミにたたかれて懲戒免職に追いやられていただろうか。いや、僕の経験は30年以上も前のことだから、僕が命をたっていたにしても、「それくらいのことで死ぬなんて、弱い子だ」と、僕のほうが情けない目で見られていただけだったろう。まだ不登校や引きこもりという言葉もなかった頃、今みたいにモンスターペアレントの時代でもなく、むしろ、先生が絶対の時代だったのである。

僕はあの頃、自分が同一性障害（当時はそういう言葉はなかったけれど）と思って悩んでいた。他の男の子たちは、皆、先生に素直に従い、冬の厳寒のなかで裸になって、走り回っていた。最初は抵抗があったやつもいたはずだ。しかし、いったんそれを受け入れてしまうと、それが普通の状態になってしまうのである。とはいうものの、冬のマラソンの時に、学校のグラウンドではなく外を走ることになった時ばかりは、他の男子たちも動揺していた。さすがに「恥ずかしいよー」とぼやいていた子もいた。「まさか外を裸じゃないだろう」と言って、この日だけはシャツを用意していた子もいたが、一方で、「あの先生のことだから、外であっても裸で走らされる」と見越して、体育の授業を休むことに決めたやつもいた。

僕はというと、必死の思いで、「風邪をひいているんです。だからシャツをつけさせてください」とこの教師に懇願した。この教師は、「こんな薄い半袖シャツを着て、風邪ひいているもあるものかねー（爆）」と僕を他の生徒たちの前で嘲笑した。あの時のこの教師の顔は、いじめっ子のガキ大将そのものであり、

教師なんて言うものではなかった。女性が男性に凌辱されるというのはこういう気分なのだろう。しかし、この時ばかりは、この教師も僕の必死の抵抗に應えるしかなかった。これ以上僕を追い詰めたら、親が出てきて、他の先生に訴えに行かれるかもしれない、という一抹の危惧が浮かんだのだろう。この教師は自分のしていることが行き過ぎだということがわかっているが、自分の欲望をどうしても抑えられなくて、男子全員を裸にしていたのである。マッチョ大好きで独善的、自分を大きく見せたい、相手を小さくみせたい。無茶なしごきを生徒たちに強要し、生徒たちがそれに服従してくれることにサディスティックな快感を得るタイプの人だった。

結局、他の男子たちは真冬の雪が降ってもおかしくない日に、短パン一枚で学校の外を走らされることになった。今思い出しても恥ずかしい、痛々しい男子中学生たちの裸身だった。幸い、人通りは少なかったが、通りがかりのおばさんたちがあきれて見ていた。あの時のことを思い出すと、「男って、なんて悲しいものなんだろう」と今でも思うのだ。明らかにこの教師のしていたことは、教育という名の支配であり、鍛錬のためと言い訳してはいたけれど、実際には自分の支配欲を満たしたいだけのエゴイズムだった。そのことに反発を感じていた子は、僕以外にもいたはずなのだが、従わなかったら、男の落ちこぼれと見なされる。男は、「お前は男ではない」と言われるのが一番怖い。だから他の連中が裸を見せることに耐えているのに、自分ひとりが耐えることができないとなると「男」から転落してしまう。そして、いったん転落した男は、もう敗北者として生きるしなくなっ

てしまう。事実、このことで心のバランスを崩し、不登校になってしまった僕は、男の落ちこぼれの烙印を押され、白眼視される日々が続いた。そして、僕は 50 近くになった今も、PTSD に苦しみ続けしているのだ。

僕は小学校の高学年の時点で、男であることに拒否反応を示し始めていた。スポーツがまったくできなかったため、体育の授業ができずに毎日が憂鬱だった。野球やサッカーなど男の子らしい遊びがしたくてもできず、女の子からも馬鹿にされ続けた。男性度という点からすれば、他の男の子たちに勝てるわけがない、ビリでしかないということは自覚していた。自分がビリにしかなれないとわかっている分野に一生懸命になることはできず、その分、芸術や芸能をこよなく愛した。おかげで、感受性は人一倍磨かれて、体育はビリだったけど、音楽や作文はトップだった。しかし、感受性なんて、男が男の世界を生きていくうえで、何の役に立つのだろうか。

結局、「男らしさ」とは、家畜と同然の扱いを受けても、歯を食いしばって克己しようとし、虚勢をはることなのではないか。男は女よりも「強い」わけではない、女よりも「強がる」のだ。そのことに価値を見いだせるやつはいいが、僕は虚勢をはるなんて愚行だと子供の頃から思っていたのだった。

## 2. 男の羞恥心

男には肌をさらすことの羞恥心はないのか。そのことを僕はずっと考えてきた。僕自身は裸になるのがどうしても抵抗があったわけだが、他の男子たちには、抵抗はなかったのだろうか。裸になることが嫌で、不登校になっ

てしまった僕は、男ではないのではないか。その思いに悩まされた。

おそらく、世間の人は、男は女よりも本質的に裸になることの羞恥心がないのだと思い込んでいる。でも、これは違っている。アメリカで文化人類学の授業を受講した時だ。原住民族の女性のなかには、乳房を出して生活している女性もいるが、彼女たちは元々そういう文化に生まれ育っているので、そのことに抵抗を感じないということを経験した先生から教わった。一方、男性でもヴィクトリア朝の時代などは肌を見せることを極端に嫌がったという話も聞いたことがある。裸になることの羞恥心は、文化が規定していることであって、性差のせいではないのだ。

事実、僕の知る限り、大抵の男は上半身裸になることに羞恥心がある。プールや海は、それが規範だから仕方がないと割り切るしかない。最近は男の人でも全身を覆うような競泳用水着が出ているが、あれをつけている人は、ごく少数派なので、裸になることの恥ずかしさよりも、マイノリティの居心地の悪さのほうが上回ってしまう。ちなみに最近の高校では、女子学生にスカートとズボンの制服のどちらかを選択する権利を与えているところもあるとのことだが、ズボンの制服を選ぶ女子は、学年に1人くらいだと聞いている。実際にはズボンのほうが好きな子もいるはずなのだが、皆と違うことをするのは勇気のいることなのだ。

大抵の男は、「男だから、仕方がない」と割り切って、男の規範に合わせている。しかし、あの当時の僕は「仕方がない」と割り切ることができなかった。あの頃の僕は男っぽいことをすることに激しい嫌悪感を抱いていた。

しかし、この教師にそれを訴えても、この教師が理解してくれるわけがない、他の教師だって理解できないだろう、仮に理解してもらえたにしても、他の子が皆裸なのに一人だけシャツを着用というのでは、それもまた立場がなくなる。僕はどんどん袋小路に追い込まれていった。

僕は男じゃないのかもしれない。僕は「運動神経ゼロ」で、「女の腐ったようなやつ」で、「オカマ」と言われて育った。男でない男が男として世の中を生きていくことに希望などもてるわけがなかった。世の中は男社会だ。男の規範に合わない男は、不良品であり、男からも女からもさげすまれる。将来に希望がもてない。俺は、どうしたらいいのか。僕はどんどん、心のバランスを崩していった。それまでも学校が楽しかったわけじゃない。大して勉強もしていたわけじゃない。クラブ活動もしていなかった。早くに学校を終えて家に帰りたい。毎日、その一心で生きていた。

そこにこの裸教育が始まった。僕の心は福島のような状況になってしまった。それまでも地震の兆しはあったのに、ほっておいたがために、取り返しのつかない惨事が起きた。僕は自殺か精神病院かというところまで、追い込まれていったのだった。

あの時、死んだ方がよかったのかもしれない。精神病院に入っておいたほうがよかったのかもしれない。僕はどうかそうはならなかったが、僕がトラウマ・サバイバーと言えらるのだろうか。僕は50近くになって、仕事は非常勤のまま、パートナーも子供ももてなかった。普通の男が、普通のこととして通過していくことを僕は一つもしていないのだ。僕は未だに「男」に同一化していない。そして、

そのことに僕は今でも大きな劣等感を抱いている。非常勤であることや、シングルであることに誇りをもって生きている人もいるが、僕の場合は、積極的にそういう生き方を選んだのではなく、そうするしかないという消極的選択だったからである。

### 3. ドジ？ マッチョ？ ホモ？

僕が、中学の裸教育の問題を、今年の援助学会で語った時のことだ。会場にいる何人かの女性がクスッと笑っていたのを覚えている。確かに男が裸になることが恥ずかしいとかいっているのを聞くと笑いたくなる。そういう反応しかできなくなる。「性の境界は女の側から超えやすく、男の側から超えづらい」というのは依然として真理だ。しかし、笑ごとにされたのでは困るのである。

肌をさらすという問題は、同一性障害で悩んだ人の本を読むと必ず出てくる。同時に、男性差別を訴えるブログやサイトでも必ず出てくる。重大な男性問題である。同一性障害の問題と男性問題は地続きであり、女性の身体に変えたいとまで思う人とマッチョに完全に同一化してしまう人の中にはグラデーションがあって、同一性障害とまではいかない男性でも、他の男性との同一化に悩んだ男性はいるはずなのである。

もちろん、世の中には裸になることが好きな男もいる。あれは自分の男らしさを見せびらかしたいというナルシズムである。「男だから裸を見られても平気だよ」という強がりでもあるのだ。裸になることはマッチョの証だ。しかし、僕はマッチョじゃなかった。おそらくクラスの誰よりもマッチョじゃなかった。

自分と不似合いなことをやらされるのは恥ずかしかった。

じゃあ、マッチョになれない男はどうしたらいいのか。男性ジェンダーの問題を扱った古典的な本である『ピーターパン・シンドローム』（祥伝社、1984）のなかで、ドジかマッチョかホモが男の子のシナリオだとダン・カイリーは訴えている。マッチョになれない男に残された選択肢は、ドジかホモ。ドジを選んだ場合は、「俺はどうせ、男らしくない男だよ」と自分で自分を笑うことができなくてはならない。すなわち、開き直って三枚目役を演じることだ。しかし、三枚目になるのも僕には理不尽だった。なぜ、マッチョじゃないから、笑われ役にならなくてはならないのだろうか。

僕はホモを選んだ。とはいっても、あの当時、僕が恋していた男性は、生身の男性ではなく、おおかた映画に出てくる男性スターだった。自分もあんなふうになれたらいいなあと思うような男性だった。当時の僕にとって、現実の男性は魅力的ではなかった。したがって、同一化したいとも思わなかった。

僕が現実の男性に恋をして、同一化したいという欲望を抱き始めたのは、18歳の時、予備校の時だったとは、以前、この連載にも書いた。しかし、僕は不登校という大きな十字架を背負っていた。高校に行かずに大学に行く子なんて、マイノリティのなかのマイノリティ。僕がどれだけ同一化を求めても、経歴が他の男子とかけ離れているため同一化できないのである。予備校時代、大学時代の僕は、言ってみれば「みにくいあひるの子」。一人だけ違っているがゆえに、誰も同一化してくれる男子がいなくて、つらい毎日が続いた。大

学院に入ると男性の数が周りから少なくなるため、同一化したいと思う男性自体がいなくなる。同一化したいという欲望はいつまでも昇華できないまま、僕は30を過ぎた。

そして37歳の時に、やっと親密な男友達が一人でき、40を過ぎてからは、次々に男友達は増えて行った。不登校のトラウマも、さすがに遠い昔のことになってしまったし、高校に行かない人も少しずつ増えて行き、以前ほどマイノリティではなくなった。僕の不登校体験もカムアウトしやすくなった。

とはいうものの、もう遅い。僕は普通の男性たちが、思春期の頃に通過する問題を、50までも持ち越してしまっただのである。そして、普通の男性たちはその苦しみを理解してくれない。少年期に男性ジェンダーを受け入れ、他の男と同一化し、男のアイデンティティを築いてしまった男性は、もうその時の思いなんて思いだすこともない。忘れてしまっている。前に男女共同参画センターで、男性相談のカウンセリングを受けた時、「僕だって、男のアイデンティティなんて考えたことがないですからね」と理解に苦しむような顔で、男性カウンセラーから言われた。ジェンダーのカウンセリングをしている男性だってわからないのに、普通の男性がわかってくれるだろうか……。

僕だって、裸教育がなかったら、あるいは運動神経がよかったら、どうにか不登校にならなかったら、少しでも感受性が鈍かったら、もし同一化できるいい友人に恵まれていたら、どうにか思春期のジェンダー危機を生き延びて、男のアイデンティティを築けていたかもしれない。僕は、とにかく悪い条件が重なり過ぎたのである。

#### 4. なぜ、裸が問題なのか？

同一性障害の人の本を読んでいると、大抵は、水着のときの違和感で悩んだと語っている。他にも様々な悩みはあったはずなのだが、その部分が突出しているように思える。それは、何故なのか？

水着は、最も男子と女子の差異が強調される部分だからである。水着は男はパンツだけなのに、女はワンピースである。男のほうが3～4分の一くらい隠す面積が狭い。これは逆説的なことでもある。普段の生活の中では、女性のほうが肌の露出度ははるかに大きくて、水着も同然のかっこうをして仕事に行く女性はいるのに、だけどプールだけは、男のほうが狭くなる。男のほうが、普段の格好と水着になった時のギャップははるかに大きいのだ。

水着は別にして考えた場合でも、男女の肌の露出に対する意識は非対称だ。女性の場合は、もし人前で胸を出したりしたら、猥褻行為と摘発される。ところが男子の場合は、公の場で上半身裸になることを、教育の場である学校が奨励するのである。体育祭の騎馬戦や組体操などを男子全員上半身裸でやらせる学校は今でも存在していると聞いている。

なんとなく変だと思いながら、僕はこの問題を考えてきた。しかし、裸になるのが嫌で不登校にまでなった自分が情けなくて、大学の3回生の頃からプールに通い始めた。最初はYMCAのフリースイミング。ある程度、自信がついてからは、由緒ある京都踏水会の成人コースでたっぷり何キロも泳いでいた。毎日のように女性も含めた他の人の前で、裸身を披露していたのだ。今は毎日ではないが、

近くのスポーツクラブのプールに通っている。したがって、普通の男の人よりもはるかに人前で裸になった回数が多いので、裸を見られることにはすっかり慣れてしまった。しかし、今でも違和感が残っている。男の性的な部分はペニスだけではないはず。大体、裸になった時に他人の目の位置にくるのは胸なわけで、そう考えれば、男でも胸を隠すのが道理のような気もするのである。

でも、やはり、俺は考え過ぎなのだろう。普通の人には違和感があっても、それが男の規範なのであれば、受け入れてしまう。羞恥心よりも、同一化の欲望のほうが上回っているのだ。しかし、僕は、男の子に同一化することにどうしても反発があった。どうしても嫌だったことを、教師から無理矢理強要されたことが、心が壊れる原因となってしまったのである。

ジェンダーの催しなどで、話を聞くと、思春期の頃、どうしてもジェンダーに違和感があったと語る人は女性のほうに多い。ある知り合いの女性は、「私は中学の時に、皆で一緒にトイレに行ったりだとか、女の子がよくするパターンのことはどうしても抵抗があって、できませんでしたね」と語っていたし、また別の女性は、「私は中学の頃、一人称がなかったの。自分が女だということに反発していたから『私』とはいいたくなかったし、だけど、『俺』とか『僕』っていうわけにもいかないし……」。

男性でも、小谷野敦や伏見憲明のように、すでにジェンダーやセクシュアリティの世界では有名になっている人たちは、著書のなかで、ジェンダーに対する違和感を吐露している。しかし、一般の男性で、こういう問題を

カムアウトする人は、女性に比べて極めて少ない。やはり、男のほうが自分の性にこだわっている。実際には同性愛や同一性障害に陥るのは、女性よりも男性のほうがはるかに多いので、男性のほうがジェンダーへの違和感強いのではないかと思うのだが、男は女のように正直になることができないのである。繰り返すが、男は、「お前は男ではない」と言われるのが一番、怖いのである。

## 5. 疑似ゲイな生活

僕は今でも同一化できる男性を探し続けている。そして、ある面、親密さを分かち合うことのできる男性は、たくさん見つかった。そして不安になると彼らに会ってもらう。

今年の2月入院した時、初めて全身麻酔の手術だったため、不安だった。僕は前の日、何人もの人にメールして、その不安をぼやいた。返事をくれた人が何人もいた。すべて男である。

この原稿を書いている今日は、実は、30代の男友達と須磨に行く予定だった。海水浴だ。しかし、残念ながら雨でつぶれてしまった。でも彼は僕の部屋にやってきて、「残念ですよ。今日のためにタンクトップ買っておいたんですよ。俺とお揃いですよ」とグレイの薄いタンクトップをプレゼントしてくれた。彼のは黒だ。彼と僕は、ペアルックを着るくらい仲良しなのだ。

また、これも雨でも降ればつぶれるだろうが、20代の男友達と川遊びに行こうかという計画をしている。彼からは、「僕のバイクの後ろでいいですか」と言われた。「いや、それはまずいよ。俺は頭が大きいからヘルメットが

入らないし(笑)、電車で行こうよ」と答えた。しかし、彼が、僕を自分のバイクの後ろに乗せてくれてもかまわないと思ってあげていることがわかって、嬉しかった。細マッチョのイケメンである。

明日は、10年来の友人と大阪のスパワールドに行く。彼と会う時は必ずスパワールドだ。スパワールドは、温泉、プール、レストラン、マッサージなどたっぷり4時間は2人で遊べて、話ができるので、2人のデートスポットみたいになっている。

夏休みは、東京に遊びに行く予定だが、ここではかつて京都にいらした鍼灸の先生とかつて京大生だった友人と会うことになっている。2人とも僕よりはるかに年下だけど、鍼灸の先生は安らぎを、後者の友人は刺激を与えてくれる。

僕の生活は疑似ゲイである。これだけ僕が男とばかり付き合うのは、同一化を求めての旅なのである。『妖怪人間ベム』の「早く人間になりたい」という台詞は有名だが、僕の場合は、「早く男になりたい」のである。僕は50近くになって、まだ「男」がつかめないのだ。

## 6. 男はみんな男が好きだ。

男をつかむためには、ホモエロティックな男同士の絆が必要だ。

『狂った果実』(1956)は、石原慎太郎の原作で、石原裕次郎の出世作だが、この映画を見ると、これがあのホモ嫌いで有名な慎太郎の原作かと思う。避暑地で若い男たちが遊びまわる話だが、男同士の裸の戯れが満載である。今の基準で考えれば間違いなくゲイ映画と見られるだろう。

『火まつり』(1986)は、中上健次の原作で、主演の北大路欣也が数々の主演男優賞を受賞したが、和歌山の山奥を舞台に男っぽい山の男たちの裸をたっぷり見せる、神話的なドラマを描いている。北大路欣也の美しい身体があつてこそ成功した映画で、「男がうずうずする」という台詞が今でも印象に残っている。これも今の基準では同性愛である。

『MISHIMA』(1985)は、三島由紀夫の伝記映画で、ハリウッドの監督により製作・監督されて、日本では三島の家族の反対でお蔵入りとなった幻の映画だが、僕は見る機会があった。緒方拳が三島に扮しており、彼が雪のなかを他の男たちと上半身裸で走る場面が出てきて、僕の中学の時のことを思い出した。三島に同性愛傾向があつたことは、自明のことである。

そして、『棒たおし』(2003)は、ほとんど話題にもならなかった小品だが、城戸賞受賞の脚本を映画化したもので、男子高校生たちが、上半身裸で棒倒しをする場面がクライマックスとなっている。この映画は、太宰治の『走れメロス』の少年版であり、少年同士の友情と男に同一化したいという心理が微笑ましく描かれていて、誰も見ていないような映画なのに、僕は思わず論文の材料にしてしまった。(関心のある人は、國友万裕「メール・ボディ」という論文を探して欲しい。この論文で、僕は、この『棒たおし』と『ウォーター・ボーイズ』を重ね合わせて、男の裸の問題を論じている。関心のある人はそちらを読んでもらうということで、今回は紙数がついてきたので、映画の分析は割愛したいと思う。)

ちなみに『棒たおし』は、ほとんど誰も知



らない映画だが、ゲイサイトに大きく紹介されていた。体育祭の棒たおしを男子全員裸でやらせるのは、男根の力を見せつけたい演出だが、それはゲイとオーバーラップする。男らしさの絶対条件は「異性愛」であるはずなのだが、男らしさを追求することは、皮肉なことに同性愛につながるのだ。

男って、結局、本質的に皆同性愛なのである。それは、男はつらいから、痛いから、男同士で傷をなめ合わなかったら、やっていけないからだと僕は解釈している。僕も、男の友人たちと男同士の語らいをする時、男に生まれてよかったと思う。男は痛い、つらい、損だと思いながら、こいつらと同じ男でよかったと思う。とはいっても、彼らと僕は身体の関係はない。でも、精神的には十分同性愛なのだ。「俺たち、精神的には同性愛だよ」と僕が言うと、ある友人は「いや友情ですよ。でも、男の友情は、女性との恋愛よりも重いんです（笑）」と答えてくれた。

これから僕が男のアイデンティティをつかめる日がくるのだろうか。でも、男のアイデンティティって何なの？ おそらく、普通の男たちは、思春期の時点でいつの間にか自分が男だと思い込み、そのことについて深く考えずに男をまっとうするのだと思う。しかし、思春期に、「僕は男ではないのではないか」というジェンダー・パニックにぶつかった僕は、50 近くになって、自分が男だという確信がもてないのである。

誰か僕を男にしてください！！